

海外新話

三

18 19
1951年5月

リ 8
5488
3

35
30
25
20
15
10

門號 5488
卷 3



海外新詫卷之三

英將義律到天津江事

英寇定海の島地を攻とり是小佔據するのをも
ぞ迎頃廣省の虎門福省の厦门をも奪ひる
よ北京小注進ありされば帝深く宸襟を惱され
先錯廷臣の糾纏小任せ林則徐がて廣東總督の
官公去らしめ伊里布降善の兩大臣へ廣東總督
にの諸省下向して迎接あづべーとの沙汰す
義律の定海不至て卑くも此事が傳へ聞き喜て曰我
恐む慶の林則徐官爵を奪ひ去らし一上六清國の備

35.2.25
藏書

將士更小忌憚する者あり我自ら北京ちよた
天津に小船を進め入と直小都城小到り魏く清主
の前小於て和儀を待水も既小け方へ奪ひたる西の
定海及び虎門厦门の二處をも差返しとすふうそ
廣東諸物の交易ひかの如く取扱ひうべ我英吉利國
の大利を示すと義律即ち大船小うち多う蒸氣船
一艘を後ふ隨ひ七月月中旬定海の湊を發一遙か咸山岬
を経廻一 天津の湊をも着船を此時伊里布の湖に下
到りんとも途中小於ては由於國を逆走北京小入附へ
國の一大支あうと驚きその地より引返一兩月が歴キ

て天津小豆うなづ大船一艘蒸氣船一艘入津を支よう
伊里布の軍と義律が出會ふ一隻の子細が尋ねるが義律
卷で我わ東小到り皇帝の前ふかれて奏進ひ一対を
あう願くへ此地より上陸せんと是を因て伊里布のぬく
思案あつたがふ今彼等わ東ふ事うきく都下人心の擾
動大方あるを假令てみ天津たゞとりども帝識と去
支不足の地あれば一日も早く退船せむふ如ぞと
即ち義律みむれく我不肖ありと人乎天子比大命
が蒙りておの地ふ下れ何事不拘うぞ願ひの前あくべ
我小告僉人と云ひ教義律とえて御だ御邊ようほ

版言より猶々一元本は皮貴圓みむろく數万艘
の軍船一出候吏の去率廣東へゆく林則徐の政
トを率領して英國の人民を掠取服せり
支那通商あるゆうにて英國の人民を掠取服せり
故に我等命ばうきて大軍船を發一貴國海島の錯
識を攻撃一終よ林則徐の旨まくして國民のあらうを
歎んと歎するる今則除官爵を充され御をすび
小琦善の奏大清廣総浙の諸省を巡査せらるゝハ
我等列よ遺恨あり候ゆどく親交を結ひ廣東小
さゆく諸物の交易許容あらば我等棄て難可の宣海
さうひよ虎門厦门等の地所の内と卑速返還一數百

艘の軍船直ふ洋帆もべーと云々されば伊里布ま
養ふく頗ひゆりむた續今ようか承ふよう奏聞を
小ぬいても宣めて奸密あらべ一然れども又矢津の凌
の外國の侵船搜漏のことをあくも倣て免くか帆一
廣東府ふ到り命令の下既成候候もべー既小琦善彼
地へ下向セ一ふよ内と要細返答の義あゆめてちかる
ら毛色人よう申達まべーと若り敷ふ英將軍殊も
まち承諾す一即日より廣州返船一遂ふ廣東府
みぞ向ひり矣

琦善於廣東私議和事

斯^ハて伊里布^ハ天津^ト急^ギ小京^ハ立^ケテ英將義
律^ア修^フひの詔^ミ逐^ハ奏^シ進^ウ一^タ御^モ帝^ハ御^モ色
を^ハ取^ル善^ハら^モと宣^ハく遂^ハキ^シ固^ム不^レ禽^獣ふ^シと
あ^ハく^シて信^義と守^ラモよ^リて朝^ハ和^ハ交^ハを續^ベと^ハ大
き^シ小^シ修^フ公^ノ背^ハみ必^定る^ク不如^レ諸^侯の將^士ち^く
を^ハ竭^ハして遂^ハキ^シと延^ハ治^ハてり^ハて清國海^シの薦^ハま^ムむ
旨^ハと^クて允^角ふ^シ仰^ハ伸^セ寄^リ行^ハ又廣東^ハ小軍馬^ハと^シも
て^シ清^カ若^シ小^シ紙^ハあ^リと^ク同^シ義^津そ^ノ地^ハ到^リ和睦^ハと^シひ交
易^ハ通^ハ商^ハ私^ハ求^ムと^ク人^ハども^ハ陥^ハ攻^ハして^シ伸^セ寄^リま^ムと^クを
彼^ハ若^シ上^シ陸^ハあ^リふ^シの^ハ其^ハ油^ハ斬^ハす^ル所^ハ私^ハ見^ハ過^ハ一^日

と生^ハ捕^ハり卑^ハ小京^ハへ^シ誠^ベー他^ハの^シ人^ハども^ハ至^ハ不^レ憤^激
あ^ハて仇^ハ妨^ハふ^シお^ハび^シ此^ハ又^シ多^シく^シも殺^ハ御^モ容^ハ捨^アズ
く^シモ^シと^シ降^ハ高^シて^シよう義^津の威^ハ名^ハを^シ聞^カ畏^懼き
旅^ハより^テは^シ詔^ハ私^ハ受^ハて大^シの^ハ痛^ハ感^ハ一^シ英^モ將^モ義^津の^シね
今^ハ入^ハ津^ハせ^シ所^ハ墨^ハ何^シんと^シ案^ト頗^ハへ^シろ^シふ^シ果^ハて
十一月^ハ下^シ旬^ハ數^ハ十^シ艘^ハ大^シ船^ハ起^ハひ^シて^シ別^ハ裏^ハ斬^ハく^シ義
律^ハ隋^モ若^モ既^シ小^シ有^シ謀^ハあ^リと^ク聞^ハて即^ハち使^ハ者^ハ然^シく^シて
對^ハ面^シり^シ一度^ハ通^トド^リ々^シ小^シ隋^モ若^モこれ^ハ阻^ハむ^シと^シ然^シく^シて
あ^ハず^シと^シ長^シせ^シ義^津あ^リバ^シ謀^ハ入^ハて對^ハ面^シせんと^シ
其^シ月^ハ出^ハ立^シ細^シ羅^モ紗^モの腰^ハ小^シり^シあ^リ腿^ハ長^シと^シ實^チ

黒波の源履船を肩のうへ金縫の厚縫船着多
脂のため金のことを星のとくをも固めせふ底ある英
吉利園の後方のにて漁ひる漁船腰よ佩年年數十人余
多く漁付被船が漁せ餘くと上陸一城門に向ひて実
小數十万人私軍の總大將とぞ見えぬける斯て奇若小對
面りて同去月天津の凌ふねのて伊里布公以て交易通
商頗ひ公假報宣めて絢容あつやと同られ海若恐怖の甚
き本國く一舟戰慄一君命の重き公も顧せ私の所を取
て和賛公さう結び緒物の交易旧のどくを許一ぬ養濟一
画の下小海若の心腹怯弱りて畏る小是づる事成

察一即ち因縁うへ香港の地を長く續支夏小商船と
墨んと欲もあり客许客ありゆやわらかと同り此ふこれ
まで清若ハ脚養みゆ一殊せり所謂懲沸湯者吹冷薰
傷弓之鳥畏曲木とや清若ハ兔角小義律が桂枝を
換せんと公のみ恐且明且道光廿一年十二年正月八日
省城迎ま達矣港と人を愛めて年の頃十七八より女
の肩用形優小脣殊小清らうう公二十人身小綾綿
縷を著せとす不綵竹紙奏一歌舞とよきよ山海の歌
者數紙一肯酒泉のとく漁公連將軍体とを下り
とて其余裏向の商人數百人と舟底板を集めて作

圖
義律應將逆饗



法外真言卷三

王



狼せう嘆きべ一將軍の心中唯小周備苟且公然て更に
治め戦闘が免るより地の計策うとぞ思へふけり

官軍到着廣東付燒討虜船事

去程小清若ハ英將義律と一旦和睦せど久々平市
政勢ハ急ト法令の行ひ宜ばり所より度徳あ者の發動
月とて休戦ア居民等官軍の如ク相妨シ恰も
大旱小雲霓を全むのこちせう二月十二日參贊將軍
楊芳滿列々び小湖南の兵一万八千人と率ひ有城小別
署を楊芳先自ら至埠小よう地の形勢と察一星ふ
よし必勝の計策を措き而後城門小入て是方の門と

飄と國た悠々閑暇の休が敵み少一後軍の縛て如既
不待けり同月廿二日靖遠將軍奕山湘兵六員雄兵五
千人を率ひ叅將隆文ハ河南貴州江西廣西等の兵
二万余人を率て到着モ其外諸別の兵遁々小池集り
都合五万の兵城の内外小充満せうと直に見て廣東上
陸の者人ども大の不恐怖して即時小逃れの用意とする
皆く虎門の方を引取んとモ將軍奕山より狀國を
我考命兵奉て遂には地へ來今ま敵兵取逃一往の
甲斐うあ一人も残らず討殺モ一と下知されば士卒甚
勇んで我先ふと擇かず將軍奕山自ら精兵二千人を

率ひ虎門の方より退んとする夷人いじんが攻撃を經て未だ打たたて縣ある今いま英吉利海えいきりかいの大筒を用の物とありその枝が船ふねを燃やかす官軍益氣えきを得て縱横そうようを呂ろ小薦こし例れいも黒色くろの夷人いじんども大の混雜こんざつ一已ひとりが持たる筒先つばさきの鋸のこを駆駆のそ利りもあり又また脇わきを賣うくもあつて用もちふ者ものがあつたれば時とき寒山士卒さんざんしそつ小下げ初はじてこうと一方いちらうの國くにが解わかるもふ事こと人ひとを残のこすと逃出とうしゆつ官軍くわんぐん又またと被逐ひしょく追蒐ついしゅう黒夷くろいじん十人じん白夷しらいじん八百人はぢゃくじんを討取とうしゆう討漏とうろうされず。者もの半はん海かい河か赴おも瑞舟みずふねが末すゑて逃おと去はなんと一ヶいつか年ね參將楊芳ようぶつの強殺きょうせつる伏ふく兵へい小其階こしけ公こう戰たたかり切きり猶よ又また立たつ百人ひゃくじんをう討殺とうせつり遙冲とうとう令れいの船ふね是これ爲望まほ見みて敵てきを

まれま亦よ折節ちせつ海潮かいしお退しりぞき加まる小周こしゅう甚きん惡あくくして弛ゆる九くの隣となり小属くわくまで船ふね迎むか寄よるよと總ぜうひ毛けを以もつて見み物ものを斯すこト夷いじん人ひと一戰いつせんの下げ小體こたい命めいを失うしなひまことに是これ非ひくと沖おき令れい軍ぐん船ふね小ことゆくとゆく返か去はなせせ官軍くわんぐんの益防えきぼう禦ごを嚴重じゆう小こ必ひず此こ度どの返か一軍いんぐんああと相あわ待まつ所ところよ果こして四月朔日よつげ蒸氣えいき船ふね二艘ふね大小おほの軍ぐん船ふね十じ五ご艘ふね湊みなとを指さて馳集ちしゆも英將えいじょう義律ぎりつもも使つか者ものを遣おとつて同去ともいは月廿四日よ我われ軍ぐん虎とら門もんの戰たたかひ小打こうち負ひ遺恨いひん也や此こ度どの不肖ふしょの義律ぎりつ大軍だいぐん移い公こう帥さしひ仇ご怨おん報ほうりんる是これ小こあり明あ二月子この制せい計けい小合あ戰たたかひも初はじりああくと海かい上じょう一必ひ大炮だいぱの玉音ぎょくおんよ響ひびきた號ごうふると煙えん火ひ國こくて參さん將楊芳ようぶつうち

喰ひ大筒の火薈迎頭孫一軍人思へ候ふうち總給へ且又
合戦の事下めに固より我願入るも何ぞ明日か乃ん只
今やても若一うそぞ返答を候ふ於て參將楊芳城が
離諂ひ一里際の花塘とりて地ふ五千の多兵陣一右翼と
きり握る張必保西うる臺場をとてお取り八千の兵備備へ
中權とある參將隆文東うる臺場小擣り四千の兵が布た矣
とあり且漁船二万艘小燒草が滿載一祚宮保水勇四万人
を率ひ其船をりて湊の内お馳り奇兵とある二日の早天莫
れの大船陸續とて押寄せまづ祚宮保の船が國樹け一
敷よせんと石火矢數十挺連發を祚宮保へ水勇小下りて

黒胡の中公凌ぎ周上ふ、赤廻一二十艘の燒船小火をを
とす水濱一なるふ過ごぞ敵船の中间は濫れ扇甚大帆擣ふ
船移り船よう船よ燒延て火船天を奮一黒胡海を掩ひ身
人等往く間も明にも向き得ぞて困苦せうその附祚宮保の
水勇を率ひ原の所よ渭陽つ斬て考人の胡の中ふをて途
方を失ひ益岸近く船を寄されば其進退角廻うるぞ之以
既て官軍機若うと所の臺場より大筒數百挺打放つ
その玉大船の船を貫き又大船を破り龜が牌き加る小燒船
の火も甚く考人の復讐言語ふ辱一難一只大船の中ふ
捨て悲峰の聲を聞のみうる營附の弓ふ大軍船七艘蒸

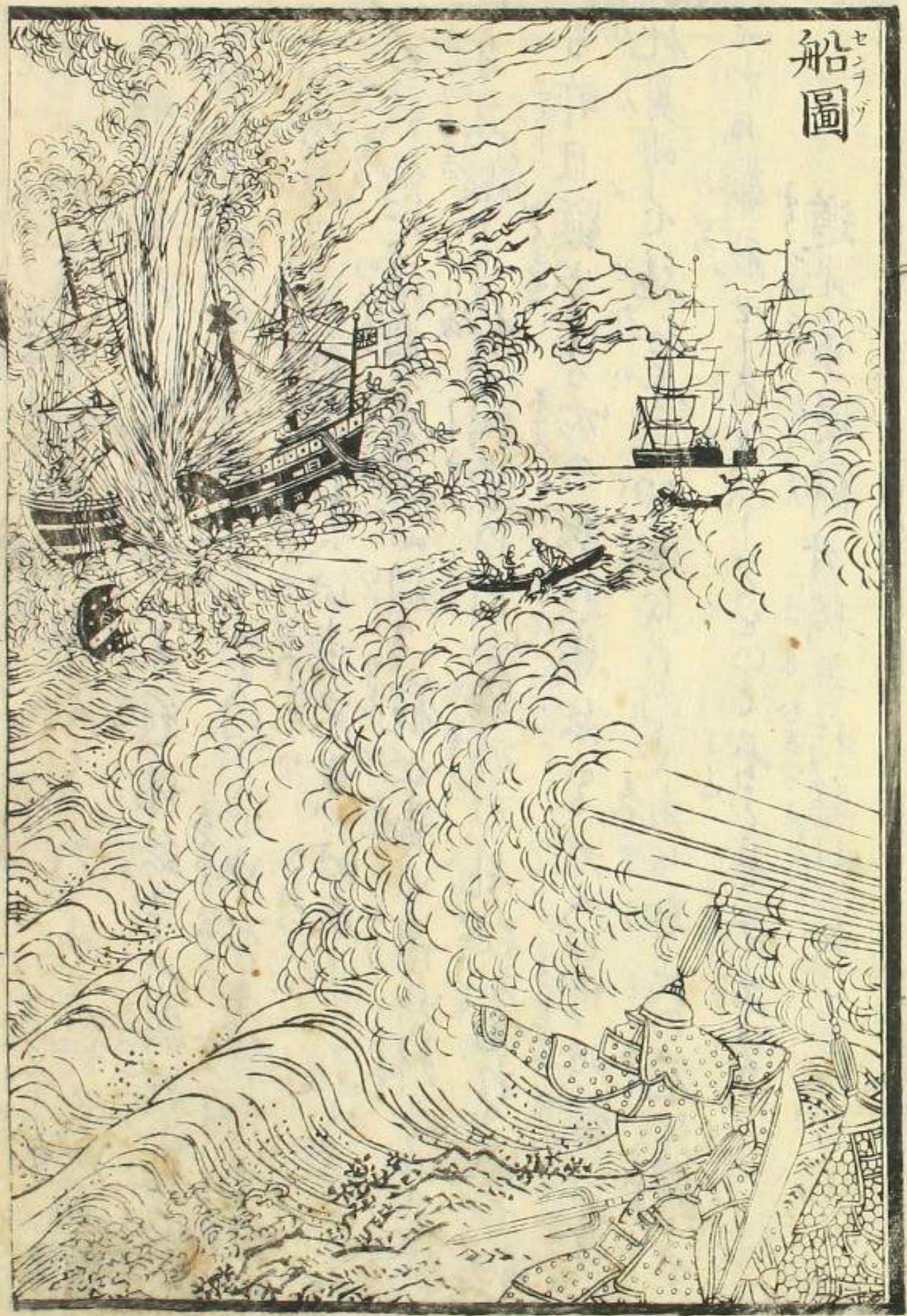
船二艘が焼亡し、衆人の死傷數十名を出し、
遂に特義体自ら大船小うちより蒸氣船一艘と後から入る
沖合より馳来り、張必祿の陣所が因掛けのうえ付懸する石
大矢がり内く筒先下り小打放り其玉鳴渡内く必祿の備へ
する布の土居小火がとう起て二丈脇りも深く寺邊どり總で
又放んとすり所が參贊陸文心得うとゑかう八歩行乃
大筒が強氣籠め檣のうふする衆人數十人をうち戻ま
出ふ於て義体叶ひと奉ふドて浪ふきそくする布の蒸氣
船ふ素移り沖合遙か逃去ぬその隊の東船が岸近く攻め
寄るといふども陸文必祿あ將の備へる東西臺場の中間よ

おで十字の鉗が緊く打立られ、藝園の天竺緒島より催れ
来る黒煙をもまた火船の甚まふ碎易一傷き得て返船
を先計らうて水中ふ身が投ト生残りする黒島の衆人
彼所の岸邊の汀ふ游ぎよんとせーが此亦祁官保の帥
る水勇の居小豆く打殺され殲る者とて更ふう一橋湊
にかへる軍船二千余艘あつまうほども重死人の多きが
思て何くとももく退去せら斯て官軍のあ度の戰闘が勝
利成得喜び零んで勝鬨あげしき声矢ふ裏き地
ふ振ひ西洋万里を國のそとまでも響き渡る
怪むぢうねう

粵秀山觀音靈驗事

粵秀山の有城の東山ふあ内で度東第一の勝地ありその
峰巒甚高々々ぞとつどり奇石怪岩層重とくとく瀑
布すみ頂きより洒き松柏蒼鬱とて翠波瀨一遙小海
水と相映え風景の佳麗あるよ面畫ふ盡一がよ古昔
よりそげ山上より祠雲を絶け觀世音の本像を安置せ法
土人の篝火燭くも斬る事あり此度官軍の勝利ありと
人云明の心がり内く祈願もくらべ其雲應空くもあく
どく人間の功徳少くらざる支とれ初ぬ四月一日英寺と
全く觀世音の功德少くらざる支とれ初ぬ四月一日英寺と
戰團の最中小粵秀山の方より一片の白雲味方の陣

中向山と庵事と見えしき衣冠儼然する一の老人顔れ
か車上柳條を把て敲より打懸る玉櫻の中人身を投ト頻
小刀打消の模様あり又張必縁が先の士卒百余人全
身の筋まで備くと小空中ふ声あくと同危哉と士
卒等急ぎこの地从去ベーと依て士卒へ不思議の想
かく一軍逃其慶を退けるが果して英將義律の射よう放つ
而の石矢矢頭土居の筋ふ碎け筋極大等ふ死没一そ
声百雷を散く然れども士卒等既に神縛ふ程せ其他と退
いたれ火毒ふ更生者更ふあ又一の奸民あり遂に
み心を通一度東城内の橋硝倉ふ火公掛布櫓樓火燒



船圖



總兵
討夷
福燒
永陵

聖
高タカシマ一將士の聲騒タウヂョウ引アヒトせんとシテすみ其奸民少成掛スモウムンシヤウジンガフツヅク
3時トドクふ當アキ山ヤマく右ミタの老人衣冠儼然イケンヨリヤハラとシテ縮硝食クサニシキの事モノ
まく守護モロコまく成見ミミる是シテふよヨシく心中忽ハヤシ小戰慄サムラク一經イニシ
大成タクル掛タクル支族シヅクを利メシマスへは者ヒト不因ムカシふ吐血トクセキと死マリせりとタケ
略戰タクシキ終タマリて後アフタ嶺リョウ秀ヒカル山ヤマふ前マサニ觀世音クンセイモンの儼成ヨリヤハラ鮮ハラハラ小滿サン
身焦櫻ヒカルサク一猶タマひ祠シテ雲クモの内ナカニみ縮硝クサニシキの効キを覗タチねタチて悔ヨロシて知シテ
る昨日顯ミタ出アヒト不ハシマの衣冠儼然イケンヨリヤハラる老人シニアの脚シタ此シテ觀世音クンセイモンの
化身ケンソウみて施無畏ゼムイの功德コトダムなりとシテ先生セイシヤン却ヤハラ火ヒの厄ヤハラと驅スルて
これ解脫ゲドウせりめ縛タマシひとシテいとシテちくぞシテ見えシテう
道光帝逆鱗ゲキリン付タタキ琦善キサント行罪科キヤウ吏

時善の惡吏諸省の將士よりと梧の墨引づくそち
往進ありて帝大不憤激るゝ猶ひて曰憎き侍君乃
所為る事如何其身逆夷小對コル合戰する夷怒怕れ
とて朕より下知せらる先み和交が通候び通商交易
を差許ト且又香港の要地をのべ容易小波へよる
支うある因体有損傷まと云候ふ絶タク既タクよ奕
えうちをうからまゆるを山陽芳隆文等の備將廣東府小到着の上云清居勿々
石還さべき由みて九百里の長程途中の路雲固巖重小
あて立月中旬小京の都城トヨウを看よけ斯て帝邊緣
甚く刑部の諸官人を左右み列座せしめ朝廷より出御

あくと親く寄善の罪状を結同す。終より第一ヶ條へ
汝廣東下向せ。へ全く海邊の防禦が嚴重みて逐
處の強制を取鎮り人民を安堵。一中華の武威と仰て
マキシム耀さんぐる。為もか考人の机操。日。月。長。ト。汝
何ぞ本偶人の如く座視して進戦の心。ヨリ。第二廣東到
ヨリの後。唯。小林則徐。鄧廷楨二人の政事悪き様。ト。朕
小訴ひ汝。何ぞ軍勢の支。不於て一つも諸将と相會議。セ
ル。奉。シ。第ニ正月十五日。蓮花港。不於て數十人の妓女
が招き集め。酒筵を設け。遂將義津が始めて。其余
マサニ。の。後。人を招き。供應せ。何の為。うる。ゼ。汝。又。連
累向の老人を招き。供應せ。何の為。うる。ゼ。汝。又。連

首義津と心腹衣服せ我邦の人民ふ敵對するの所存
あり。や。第。四。汝。廣。東。下。向。て。寵。周。ま。所。の。鷲。鵰。と。い。く。者。元
來。無。頼。の。要。往。め。て。而。て。廣。東。不。於。て。法。度。が。犯。一。山。東。
不。逃。と。同。汝。此。度。山。東。の。地。不。遇。ぎ。是。者。公。子。連。者。識。少
事。ふ。及。ん。で。大。人。往。覆。の。更。彼。不。の。ミ。打。伍。せ。し。罪。人。が。撰。用
タ。何。の。子。細。き。や。第。立。汝。未。ざ。廣。東。へ。進。發。せ。ば。以。前。朕
み。告。回。く。香港。お。於。て。ハ。南。海。同。侯。の。重。地。キ。決。て。ト。れ。不
ス。て。英。夷。ふ。よ。べ。く。ぞ。彼。若。寢。ふ。佔。據。ま。よ。た。必。モ。中。華
の。海。運。が。妨。げ。争。札。の。場。を。用。ん。と。モ。為。る。を。此。度。義。津。乃
緒。ふ。任。せ。其。地。不。以。て。容。易。ふ。付。よ。ー。る。何。ぞ。前。後。ど。の

相對晤考や第六外國の者より諸者の將長へ書翰せし
出をみ於て一見の上これ以て北京へ進達一車の大約
の諸廷臣評議の上文と宣旨承認ひ所處成させり汝等
て其法令心得ありうべく廣東本於て日々英將義律と
書翰相通ト何ぞツモ其書を以て廷臣ふ遞達考る事
あらや第七去年以來來人上陸ハ勿徴紙令紙中うち大
薪水米穀其他一切の食料成送考立成禁考其故如
何とされば遼東數万里航海一糧食ふ支欠考たれ
一日とて我海岸ふ停船する能ひを直ふ退去せんのを
汝も亦此洋線ふ頑り居て廣東の去民ふ命ト日々食物

然夷人小喫へよ何の意考や第八廣東城内ふ需て備
ある所の大筒數十挺鏃鎗破裂して用史考を汝勦か之
を鑄造せんと成請ふ候て費金若干兩充當せり然至
今日ふる勢て其筒一挺も成然考奉考と聞く如斯
武備充蔑小一既ふ差渡一たる金の何事ふ用ひ考
且此度汝一己の所存號以て遂將義津と和睦致焉一安
門廈門の地をも我ふ返還せん依然とて佔據一諸省
の城地取れ様を汝固件報損するの罪不一とて是考
況や右八ヶ條の罷兵犯一何の面同く覲然とて愧る

と、身大任不當り其職を辭せば此殿分明の如狀
う手人と宣ひて斯辰へ斯も更の子細宸諭小達する
クと今ハ己が心小耻一言の申聞きも無く頭を地ふ低也
唯深く罪紙謝するのみあり然ども其罪免れ難一とそ
即日官禄を捕たりやの家財と以て悉く官小役め親
族一派の者ふるるまで又小狡善の憲戒とをありみる
て法威犯一軍勢不怠る者の懲戒とをありみる

英虎再攻廣東付城將議和事

五月五日逆夷の軍船大小四十餘艘省城の東門小向
て弛集り石火矢數挺打放つ賴小壯屢の城堅雲國

至て官兵の負死人更ふ多一唯靖海門の矢倉一ヶ所打
崩けり旁人絶て火箭を夥く放ち城外を燒拂んと至
其第東門外ノ人家ふ然付て黒烟鼓塞り下風小立
て甚塲と守り士卒等烟火咽びて林へ渴む退て城
中へ引退く其虛ふ赤ド二千余の夷人上陸ニ一方カ
甚塲取車ひ是小備も大筒の火四小轍く行駆らむ
邊の渾者百余入を以て先遣すとテ南湖より陸續と
志上陸せんと至四川の会合處上トと岸上に於て防
戰も時小城中より又これを防んとぞ大小の渾也

敵がどく寺放つ然れども其玉敵不中る事少く却て
味方小虜も四川の兵を多く打殺し自ら敗れの猖狂
用くそそ候べ一制軍祁壇先駆より其軍場を奪ふる敵と
追拂さんとぞ鐵ひ弓矢人の鮮光流きふ物れ此亦城中
か引退く遂走今ハ破竹の勢を得て更小泥城とつて西よ
り上陸一小門小向つて攻寄う時小官軍數多の火薬
破綻重ね城門が塞ざ精兵千余人を擡びて城外トヨタマから
出一防戦せ一其兵左もふ藤牌を把り右も小草刀
左も一凶矢を極めて戦闘も其も勝の盛あると四十小
龜り十百人ありて夷人これに辟易一傍へ死亂して逃去

らんともば時湖南の官兵等精兵の働き抜羣無を思ふ
と直成城を竊小城外めめて火砲彈打懸殊方紹等を滅
すうけん精兵の思ひの外ある事ふ出達既小段をせんとす
慶ふと直成城付大門以外の民數百人一時小弛勢精
兵ふ力と限せ湖南の兵ふ射て撃る湖南の兵大ふ恐怖
何ふともう備へ城乱とぞ追く斯て精兵の又と夷人被逐
討一三百人半り切殺せうば時緒將の室もく城中ふ立て見
物一房で出間ふ者ぞあうけり獨り縦兵殿承縦一人西
方の臺場ふあいと士卒ふ下和て同縦合死をもひ臺
場死にて敵のまみ波もふと十挺余の石火矢放筒先駆

きそ 打破^{うちひ}を達^{さき}の船^{ふね}よりも今より殿永福の守^{まつり}の臺^{だい}場^ばのと同然^{ひとな}て打懸^{あらざ}る其玉^{たま}牌^ばび盾^{たて}てたる^もが破裂^{はり}一箭^{くわ}後^{あと}み花^{はな}散^ちり永福の全身^{ぜんじん}火^ひ身^みの爲^{ため}か塵^{ほこり}網^{あみ}せ^すうすも忠^{ちゆう}勇^{ゆう}の二字^{にじ}張^{はり}て肺肝^{はいかん}み落^{おち}一箭^{くわ}れ^は士卒^{しそく}と爲^{ため}火^ひ船^{ぶね}の
中^{なか}あ立ち敵^{てき}の大船^{おおぶね}を打^{うち}陣^{じん}とそを走^{はし}人^{ひと}考^かこれ^を見^みそ^ぞ列^はよ如何^{いか}ある奇^き針^{のの}あるゆたうり難^{むず}いと將^{まつ}附^{つき}便^びを退^{しりぞ}き^さらしげ又^{また}蒸氣^{ゆうき}船^{ぶね}一艘^{いっとう}馳^は到^{いた}り^る小^こ船^{ぶね}を放^{はな}ち船^{ぶね}中の火^ひ薑^{こう}箱^{ばこ}小^こ打^{うち}破^はされ^はば船^{ぶね}忽^{すこ}ち被^は列^はて片^{かた}板^{いた}も残^{のこ}ぞ燐^{りん}壁^{かべ}と^と向^{むか}て死^し没^{ぼく}する何^{なん}ぞ引^ひん城^{じゆ}中の

諸将^{しよじょう}其功^{そのごう}大^{おほ}姫^ひと別^{べつ}小^こ一^{いち}將^{じょう}を^もて殿永福^{とんえいふく}は代^しり^る其^そ基^き塲^は守^{まも}ら^うむ走^{はし}人^{ひと}忽^{すこ}ち小^こら^うめ^う察^さ一^{いつ}又^{また}來^きて發^は砲^{ほう}を^も其^そ將^{じょう}一^{いち}戰^{せん}小^こ及^{およ}べ^る外^{ほか}去^る廣東^{こうとう}の人民^{じんみん}を^も成^な關^{かん}て永福^{えいふく}の
爲^{ため}小^こ憤^{ふん}情^{じやう}流^{りゆう}瀉^{じよう}せ^せら^るハ^る翌^{つと}六月^{ろくがつ}一万余人^{いつよじん}の走^{はし}人^{ひと}が門^{もん}
を攻^{こう}んと^も今朝^{いまのあ}城外^{じやくわい}よ^も走^はゆ^る官^{くわん}兵^{へい}を^も備^{そな}へ^る官^{くわん}兵^{へい}を^も備^{そな}へ^る見^みて我^わ先^{さき}手^てと^と城^{じゆ}中^{なか}へ^と退^のく走^は人^{ひと}等^らは^は五^ご人の地^じ城^{じゆ}河^かが
ど^と四^よ方^{ほう}の基^き塲^は守^{まも}ひ^いか^いれ^よ據^すて陣^{じん}布^ふ且^さ小^こ高^{たか}丘^{おか}よ^う望^{のぞ}遠^{とお}鏡^{かが}ひ^いか^いる^よ城^{じゆ}内^{うち}の動^{うご}靜^{しづか}を^も見^み透^{とお}す^る一^{いつ}數^{すう}
万^{まん}本^{ぽん}の火^ひ箭^の公^{こう}打^{うち}放^{はな}り^る其^そ箭^の此^{この}方^{ほう}の標^ひ彼^{かれ}方^{ほう}の標^ひ同^{とも}
打^{うち}立^たて^て錫^{すず}の毛^けの下^げ宮^{みや}軍^{ぐん}こ^れ公^{こう}打^{うち}消^き小^こ津^つき^き城^{じゆ}中^{なか}



ちで小色もたまく見えりれば將軍奕山泰將楊
芳支危一ことや思ひりん相共ふ一箇の箱が雄へ當平
の中小舟が急び今や城を出で逃落んとあけつぐ集
司玉廷蘭此由來聞き將軍奕山の前より練
曰如何支危急きと雖も兵の多寡を以て備考る時
ハ官軍移本人八十倍せり何ぞ容易小城を棄て退走
の封底う絵や我身不肖あうとひも今城中ふ立ち
而の満引四情きく貴外寺の名底く我身抜け路の門
と開ひて一戦一破げ集まる四方の其勢燐々小壁と
取度さんと固く清れども將軍の心中早和議の決

定ありとバ鬼南そり奸密そく他の諸將おむてゆ亦玉
廷蘭お左祖もろの絶あ依て廷蘭へ是れよく其坐を
詰ち滿城の兵數以て敵の燒草ふ見るゆのに情さよと禍
徳あうてそ退き乃る斯て翌日夷人益城下小攻迫候た大
筒小筒火箭天砲雜放け織内小舟も立て程を過ぎ
る諸刃の兵百人二百人ア一度お繫傷され猶火四方ふる
散り黒烟上空に昇り更少傷き得モ奕山楊芳隆文の
対かへて又廻り更少傷き得モ奕山楊芳隆文の
緒将の計策を運ふ力ある怜むべ一舟廻りの仕業紹
となり者勇んで能く遂將義理放知られが先甚者と之

敵陣さかぢんに遣りおとし、私錢ふひんを挿入はいりんと余宗仁よしゆうじんの命めいて縛く成
以さへて身取縛みとく一いつ城上じょうじょうより廻下まわせせめ竊とうと伍ご軍ぐんの家いえ
主ぬしの同伴どうばんして敵陣さかぢんに趣きま敷のし斯すて敵あ人の義律ぎりつと對面たいめんを
得いたるふ義律ぎりつ聊う黄こう一いつ丈じやうをとて對面たいめんを爲あらわす
伍ご軍ぐん余宗仁よしゆうじんの義律ぎりつの前まへと平伏ひやく一いつ城將じょうじょう夷山えいざんと和睦めいに
の類たぐいにして續入つづくるみ義律ぎりつを報怒ほうにり避さけて同去どうく同當どうとう地じ
中堂ちゆうじょうと和紙わし納な一いつ合紙あわし体たい一いつ緒物しょぶつの交易こうぎょう以前ぜんぜんの如ごとく
せんと其その機き密ひそかの事こと了とさる小奕山楊芳こいきさんようぶの緒將府城しょじょうふじょう
小列これつ英えい國こくの商民しょうみんを殺戮さつりくせり理りの枉まがる幸さい法ほうよ
あり故ゆゑは我われ今日きのう一いつ戰たたかの下げ小廣東城こひろとうじょうを攻落こうらく一いつ承うけく英えい

吉利園よしよんの所領しょりょうと爲あらわ一いつ猿さる窟くつ愁う雪ゆきのととと和わ開
て余宗仁よしゆうじんの伍ご軍ぐんの兩人りんにんの首くび城じょう地じに俯ふく一いつ此上じじょうの清國せいこく
諸將しょじょう如何いか吏しき小官こかんても貴國きくにの命めいと伍ごせんと行ゆきん後ご重
和わ睦むつ的一條いつじょう許き一いつ給きりと一いつと猶ゆ懲こころと續つづく義
律ぎりつ答こたへ然ぜんの汝な寫な續つづく之の和わ睦むつの程こ度ど許きん就すくと
鴉うぐいす片かた網あみの欠金けっこん六ろく百ひゃく万まん兩りょう并あわ小余姚縣こゆぎょうけん小村こむらて去年きさる九月
擒獲けいはくせしそ公士こうし數人すうじん女子じよし一人ひとり悉ごとく此方このへ返還はんかんべ
とありされば伍ご軍ぐん余宗仁よしゆうじん諸將しょじょう厚こだま謝あやまと城内じょうないへ立たつゆ
此由ゆゑ以さへて將軍じょうぐん夾山えいやまに報告ほうはうせし依よて城中じょうじゆうの諸將しょじょう和
續つづくの就すこ悦えき虎口こひのくの危き難なんを逃のがりこももて大義だいぎ故ゆゑ

忘れ耻辱なるび即日連將義律は對面一城下の盟を乞ふける

英虎是湖南官兵亂妨事

古語小曰有始少能有終と實う哉恭賛揚芳始て廣東府小到着せ一頃ハ日夜心在軍勢小配り上陸の夷人夷兵追拂ひ生民安堵の基業を遠んと一たゞグチモ再度の合戦共銳氣大小折け遂將小向山と和議成績求り且倭人余宗仁の送りより美女六人を以て之に代寵愛一日夜酒宴が設けて將軍夾山と同く歡樂小心戒耽るのミ將帥ある者如此されば士卒等軍

其法令を守れば敵も亦城中の緒將勇氣うれし放慢り軍の兵人百千隊があつてその臺塲を據て陣營を布き公然と一市中を徘徊一十人二十人マ釘付鉄地をもみて近郷の民家を犯入り金錢米穀を乞う余高幾と集めて食料とすを或日婦女三千人半り相伴ひ舟を打ち水を渡らんと一なる小曳人等これに見て悉く捕へ其年ようてひと醜き者をば直小泊する軍船へ携えて返させ就中黒衣の乱暴小至つて言詰同斬るを毎夜人家へ乱入一老少醜美の婦人を

擇えらぶを輪わ滾うなぎを乞ねぐ者もの汚辱おんじゆせしもて命いのち失うしなひの
一癡いつちの間ま六百人六ひゃくじん小及こしゆくととあへ准じゆんふ如ご此しこ黑くろ白しらの東とう入いり
乱らん筋すじ衣きぬのをあらむあらむ湖南ほんなん縣けんよりして募めうり來き西せい
の官くわん公こう固ごとと參さん賛さん揚よう芳ほうの仕わざ配はいされば下げ知ち法ほう賓ひん聊りょう
糾くみ目め其その亂らん妨ぼう狼ろう藉じやくせよよあれにとと放ほうて衆しゆ人じんよ攘らうぞ
此こ亦よ盈えい夜やとと城じゆ外がいの人家じやくふ押おお入りり財ざい宝ぼうが盜ぬすみぬぬ
婦ふ婦ふ桃とう甚じんき者ものハ已いづ辦髮べんぱい衣きぬ去はなて逐たど居ゐの中なかよ
混まつド味み方ほう誠まことに肉にくの消息消漏もろ一ひと英えい將しょうふ向むかひく重じゆ宴えんと求めう
りんとそ或ある疾び數すう十人じゅうじん黨とう底そこ結むすび娼娼家けや小こ年ねん一ひと歲さいをとと主おも人じん
あく娼娼女めのが招まねき寢席しんせきが同ひとせんと欲ほモ娼娼家けやの主人しゆじん

至いた底そこ惡あくミ折さく節せつ麻ま瘋ふうと患いたる娼娼女めの多多くあつあつれれが先づ
ああれれとと仰あおて寢席しんせきが同ひとせんせんああけけるるふ湖南ほんなんの巻果まんがくと
麻ま瘋ふうの氣き小こ感かん一人ひとりも強いぢきき明日あした發は熱ねつ惡あく寒かん甚じん
ききして大おほ苦く痛つうせせ此こ者もの何いかとと聞きうるるん頃ころて
人の内うち食くまましたした其その病びやくと活まままと謂いて相あ考かう小こ市いち中なか
小こ出だて往むか來らいの人ひとが用もちををて肌はだ膚はだ肥あつむむ者ものああれればうれうれば
捕つかへ直ただよ又またとと以いく刺さ殺さ一ひと其その骨ほねをを去はなり其その肉にくが剖は美うつくしし
ととううて争あらひ食くを暴ぬ逆ぬ五ごららざざるる而はりり居ゐ民みん多多く其その難ひじり
若わよよ堪かせ產業さんぎょうが廢あれれー兄弟いっけい妻子さいじ四方よつがた小こ離散りさんするる者もの
家いえ千万人せんまいじんあつあつて紙し知しぞ依よて廣東こうとう府ふ巡まわ郷ごうの民家みんか飯はん

炊々烟々上々ぞ恵も寒食の附落の如く殊小荒涼
より光景より商民等下情の宸聽小達せざるを以憂ひ
一通の文を作り四方の縉紳先生小聲告其矢如左
蓋聞普天之下莫非王土卒土之濱莫非王臣
我粵生民遭兵燹之苦且夕之危幸得各省大
兵奉

王命以剿英逆効君力以蘊民命不勝雀躍之
喜惟是湖南弁兵自二月到粵以來徒有剿序
之名有害民之實動輒邀功捏良為奸如斯罪
惡髮數難堪且于本月初二初三兩日當居民

倉惶奔走之時或乘機搶奪或藉勢奸淫婦
女甚而至於以壯勇為奸不容投訴審訊竟
私自殺戮削其骨食其肉剖其心是可忍也
孰不可忍也嗚乎壯士助兵以拒敵而兵反
將壯士作心不奮勦夷之志不祥之兆早已
先形毋怪乎禦敵之不克也伏想
楊侯爺為國愛民何忍坐視兵丁殘酷生靈若不
執將軍法以仗

天威諒亦縱容養奸耳壯士之冤魂何慰商旅之
行處何安况蒙憲示曉諭兵丁各歸營寨不得

佔住民房而湖南之兵弁不遵行仍然率行依然搶奪將來此兵之為禍不知何底也若此冤氣難填滄海恨不能轉達

聖主為此涖情佈告四方縉紳先生庶幾寃氣或伸是所切望今虽蒙

大人啓城以放臣民無奈湖南兵在城外搶刦

行李生民雖生猶死不啻遭虎之戮也悲夫特啓

鄉勇與英庚戰閩事

斯而廣東府近鄉の土民多逆走の為小其家屋を毀ち

妻子被捕之れ令涉水數層々集取れ一日所時とて

高うもるみく得モ欽差の大臣へ緒列の兵を募り
廣東の府城も充満をとり人多也頑臘病神う付
けん絶て進城の用意う却て逆將義律と心相通ド
諸事彼ノ緒列の兵も且休方湖南の兵のどきあ渡
亦暴逆をうかく生民の荼毒何う免るべき様もなし
故不廣東府近鄉の土民等相集りて曰縱令百万の兵あ
クも欽差の將軍勇氣うなばして上陸の衆入衣退拂ひ海
邊静謐小ゆもるみく覺えず不如我も相共ふ力と服
せ先づ數處の臺塲小據て陣まゝ不の衆人なくも退け
皇帝の宸襟成安ト奉んと一鄉毎小平英園の二字

書る大旗一本が押建りて猶不望と各郷の勇民喜び勇んで名く得道具を執て其下み馳集る都合五千余人天地不誓逆夷を殲滅ふまよとして心とあ。五月十日朝霧の未だ晴さる小廣東海岸の基場み屯する夷人を以て四方より取囲み縦無急ふれて懸る夷人を思ひの外多く敵より逢残のり狼狽一太筒一挺放つて暇うなれば鐵砲化兵より斧鉈等のとれたる者を振る。一ふ死とあらぐ戰闘も暫時の間は勝負如何とも見えざりける時より郷勇傍りて敗走の状が示し、急て伏兵を殺す處まで敵を撃却今こそ機善すと返一合せて奮戦を期二千余人の伏兵た

右の木蔭より一箭よ敷一数百の夷人在中を取り十重九重み攻岡む者人こね死覺て大み辟易一弓く首伏地小底れ一向よ助命ともえり外か御勇ひ並奮激一人も彌らぞ殺戮せんとするふ豈射ん泰賀揚芳城中より急ぎ余宗仁が使者とて下知りるハ故銀民等夷人小對一私の合戦を用ひ既よ先日英将義律と和睦す。うう人の聊夷人の身を創つて勿れ早速國が解てかの陣慶ふ還らむと御勇ひられ國で大怒り大聲揚て如何小歎差將軍の御下知ありて此遂夷考が空て取逃すと云はば連考度東小松て奪へ

所の臺場尽く此方へ移居。斯後一人も上陸するを數
十艘の軍船即時より退帆せし命の助け放し。わんと嘆つて
云ふ如聞て夷人を益恐伏し。其言にて某詔せし加ミ江小參賛
楊芳用を解ベトとの下知られかふ解放。ぬ然と御勇
相共小夷人の心底猶計り難いと云て其勢アリニシテ少ち
一の卿勇ひ直ふ四方の臺場へ赴きて云ふ奪還。各
卿の大旗張押用き同音よ勝利あげし。室よ零こ一き振
舞あり又その海による夷人の端舟を奪ひ本船への通
じて断截り彼等獨上陸。あらび厚く犠死せしわんと英
吉利荷槍の舟同居の者として一切夷人よ食物と送らし止む

斯て莫將義体へ先制より擋のよよをそ望遠鏡と以てその
摸様を照る見けるが忽ち一舟の赤旗底船上より開き清國艦
中の將帥に向て何やん相圖せり猶又囂喧となり者故
使者と一將軍奕山の前より告げて曰先日相若み干戈
を收り兩國和議を約する上に假令我兵卒陸上ふ勢にて
不意攻撃つゝとりて本船よりこれ救援ひ敵て一挺の鉄砲
を放さば無事何故傍りふ我兵士を攻撃し駕舟を奪
取り本船への通路を断給りや頼む和議を破て一戦を試んと
ありされば奕山楊芳相考ふ仰天あく使者は對一深く已づ
羅公紹一亘又御勇小渝して奪處の端舟と返一即刻食

物が勝へーと下知を御勇止と心得を又是より従ふ然れた
夷人等佩勇の意も猛勇も少く怕れ今より上陸一あらば如何
何する幸き因み出逢らんも計り難ーとそ一人も残りき本船
へ引退き不日又數十の軍船歸帆せりてふ依て廣東の地
一時静穩又ゆ一 諸氏安堵の恩ひ大を以て全各卿の勇民一
舉の力あり満城の將帥身み大任を受て數十万の官兵挙
率ひ敵と敵の利器山の如く積倅うと虽進戰の功を達
るのみ先ての各卿烏合の勇も及ばず後ふ逆將義律の侵
居とあるのを豈傷一うちも

海外新話卷之三終

